

池上曾根遺跡で発見された「大型建物」の復元に関する二、三の考察

ふたつの建築史

弥生時代にいともまれた巨大な「神殿」の跡が発見された。大阪の南にある池上曾根遺跡から全国へむけて、そう報じられたことがある。

一九九五年六月一七日のことである。この遺跡は、その範囲が和泉市いずみの池上町から泉大津市の曾根町に、およぶ。池上曾根という通称はこの町名に由来する。

ここに弥生時代の集落があったことは、古くから知られてきた。直径三百メートルの環濠でかこわれていたことも、一九六〇年代にはわかつている。考古学者たちには、弥生時代を代表する環濠集落として、みとめられてきた遺跡である。

もちろん、現地では発掘がつづけられてきた。そして、一九九〇

年代の調査は、ここに列をなす柱の穴を、見つけている。けっこう大きな建物のあつた痕跡を、発見したのである。

礎石の上に柱をたてる建物ではない。地面に穴をあけ、そこに柱をうめこむ。そのため、のちの世に、穴の跡をのこしてしまう。いわゆる掘立柱建物の立っていたことを、つきとめた。

穴のあきかげんから、それは高床建築であつたと考えられている。この推理に反論がなかったわけではない。しかし、現場では高床説をとるにいたっている。一般にも、高床として公表された。そこにひそむ、ある種政治的な事情については、あとでくわしく説明する。想定された高床建築の平面規模は、横が十九メートルで縦が七メートルになる。総面積は百三十平方メートルをこえてしまう。弥生の高床建築としては、最大級の施設であつたと言ってよい。

マスコミは、この発見にわきたつた。新聞だけではなく、テレビ

もこれを大きくとりあげている「弥生の巨大神殿」がつきとめられたと、あおりたてもした。これだけ大きいことから、実用的な建築ではありえない。神殿に間違いのないだろうという口吻で。

「弥生の都市国家」として、池上曾根のことをつたえたメディアもある。「神殿」を中心とした集落形態が、古代ギリシャのアテナなどをほうふつとさせる。もう、ただの集落であつたとは思えない。それは都市であり、国家をかたちづくっていたというのである。

とはいえ、考古学者のなかには、「神殿」説をみとめない者もある。そして、その数は、けつしてすくなくない。文献史学の学界はさらにつめたく、否定説が大勢をしめている。

「神殿」説がうかびあがつてきた経過については、べつのところでふれることにする。私なりの判断も、そこでのべるつもりである。ここでは、見つかった柱の跡から類推しうる建築の形を、検討してみたい。

高床とみなされたこの建築については、二通りの復元案が知られている。ひとつは、宮本長二郎^{みよもと ちやうじろう}の案であり、いまひとつは浅川滋男^{あさがわ しげお}の案である。宮本案は一九九五年、そして浅川案は一九九七年に、それぞれ発表された。

ふたりとも、考古学につうじた建築史家である。専門分野は、たがいにかさなりあう。ともに、奈良文化財研究所（奈文研）につとめていたこともある。さらに、一時期の宮本は、奈文研における浅

川の上司でもあった。

だが、ふたりのしめした復元案は、まったくちがっている。それも、形がことなっているというだけではない。復元案からすけて見える建築史理解のありようそのものが、たがいにそつぽをむいていた。

両案のあらましと、くいちがうところを、かんたんに説明しておこう。

まず、宮本案だが、こちらは伊勢神宮が、復元の手本となっている。神宮にある本殿の建築形式、いわゆる神明造^{しんめいづくり}をヒントにした案である。

といつても、内宮や外宮の本殿形式が、そのまま採用されたわけではない。それらの屋根をかざる千木^{ちぎ}や鯉魚木^{かろおぎ}は、はぶかれている。伊勢の本殿にめぐらされた回縁も、とりのぞかれた。全体として、伊勢神宮をより素朴にしたような復元案であつたと、評せよう。

この形式がえらばれた事情も、わからないではない。

伊勢神宮の本殿は、高床建築である。木の柱をそのまま地面へ埋め込む掘立柱でたてられている。そう、伊勢もまた地表に柱の穴をのこす建築なのである。

屋根の頂部にある棟^{むね}を、伊勢では、妻壁の外へとびでた柱がささえている。棟持柱^{むねもち}とよばれる独立柱がそれである。正面からながめると、建物が左右からこの独立柱ではさまれる格好になっている。

池上曾根の大型建物も、掘立柱の高床建築であると判断されていた。また、遺跡にのこされた柱穴は、それが棟持柱をもつ建物であったことをしめしている。柱のならばかたを見るかぎり、伊勢との親縁性はうたがえないのである。

そして、伊勢神宮の神明造ほど、柱の配置がこれと似かよった建築形式は、ほかにない。のちの日本建築では、伊勢がいちばんこれに符合する。

また、伊勢の祖型らしい建築が弥生時代にあったことも、以前から推測されていた。いくつかの土器絵画が、棟持柱をもつ高床の建築を画題にしていたからである。のみならず、古墳時代の銅鐸絵画も、その系譜がつづいていたことを、しめしていた。

伊勢神宮の本殿が神明造を採用したのは、異論もあるが、七世紀末からだとされている。そして、そのデザインは、有史以前の高床建築を源流に持つと、しばしば言われてきた。伊勢はその古い建築的伝統をつたえているという物言いも、よく耳にする。

伊勢神宮の柱配置と同じように、池上曾根では、柱の穴があいていた。これだけだと、地上の建築まで伊勢と似ていたかどうかは、わからない。共通するのは、地面にあけられた穴の跡だけであった。上の建物は、まったくちがっていたという可能性もあるからである。しかし、学界では、伊勢の形式が、古墳から弥生にさかのぼると、言われてきた。そのことをしめす絵画資料も、のこっている。弥生

時代には、伊勢の祖型めいた建築があったとされてきたのである。

そんな考古学上の常識をふまえたうえで、宮本は大型建物の形を検討した。柱の穴が、伊勢との類似をしのばせる建物の復元に、たずさわったのである。地上の建物まで、伊勢神宮風に想いえがいてしまう。この想像にも、蓋然性がないとは言いきれまい。

だが、宮本より若い世代にぞくする浅川は、こういう復元を肯定しなかった。

池上曾根で調査をつづけていくと、宮本案では筋のとおりなことが、わかってくる。また、新たな発掘によって、宮本案とはちがう高床像をしめす土器絵画も、見つかった。以上のような現場の状況から、浅川は宮本案を否定する。

その詳細に、今はふれない。あとで、くわしくのべることにする。ここでは、宮本案の二年後に発表された浅川案の、建築史的なふくみを説明しておこう。

一見してわかるとおり、こちらはインドネシアやオセアニアの民族建築に、よく似ている。原住民たちの大型建物をしのばせるつくりになっている。その意味では、エキゾチックにうつる復元案だと言える。

そして、これもまた、じゅうぶんありうる復元なのである。さきほど、棟持柱でさええられた高床建築は、伊勢の社殿につうじあうと書いた。しかし、同じように柱をならべた建築は、インド

ネシアでもよく見かける。南洋諸島にも、類似の建物がないわけではない。だから、池上曾根の柱穴からは、インドネシア・オセアニア的な復元も、考えうる。

弥生の土器や古墳期の銅鐸には、棟持柱の高床建築がしばしばえがかれていた。伊勢神宮の先駆例がそのころからたっていたことを、そこからは読み取れる。私はさきにそうものべている。

しかし、弥生の土器絵画などがしめす高床建築もまた、南方に共通する例がある。インドネシアやオセアニアにも、それらとよく似た建築はたっているのである。

なるほど、日本建築史上では、伊勢神宮くらいしか類例がないかもしれない。だが、ひとたび目を海外へむければ、事情はちがってくる。土器絵画の建築は南方的だったのだと、そう言えないわけでもないのである。

ならば、それらはどちらにより似かよっていたのだろう。有史以前の建築絵画は、のちの伊勢神宮を連想させると見るべきか。あるいは、今日の南方における民族建築を想起させると、そうみなしたほうがいいのか。

土器や銅鐸の建築絵画だけをながめているかぎり、なんとも言いきれない。ふたつとも、そこそこ妥当な指摘であるように思えてくる。どちらも否定はしきれないような気がする。

ここから先は、もう建築史家の歴史観にしたがうしかないだろう。

伊勢神宮へいたる建築的伝統は、有史以前からできていた。それは、古墳時代、弥生時代にもさかのぼれる。だから、棟持柱をもつ高床の跡が見つかれば、弥生時代でも、伊勢風に復元すればよい。伊勢をやや古朴に変形すれば、有史以前の建築ができあがる。宮本長二郎は、そんな歴史観にしたがって、池上曾根の大型建物をイメージした。

伊勢神宮の形態は、式年遷宮により、今日まで七世紀末の姿をたもってきたとされる。もちろん、この説にも異論はある。しかし、とりあえずはそうみなすのが、いちおうのとおり相場となっている。伊勢神宮は、日本における建築的伝統の一貫性をしめす、代表的な例だとされてきた。

宮本は、そんな伝統を七世紀以前にも、さかのぼらせようとする。有史以前にまで、伊勢が象徴する日本の建築文化の系譜を、ふくらましたがった。太古から、日本の建築的伝統はつづいてきたというように。

浅川は、しかしこういう歴史観にくみしない。日本建築という文化史的な枠組みができたのは、もつとあとからだと考える。弥生時代の日本列島に開花した建築文化も、日本のなかだけでは位置づけられない。南方との接点を、それよりも重視する。

日本という自意識にめざめる前の時代を、自民族中心的な歴史観で解釈してはならない。列島内の文化事象は、周辺地域のそれと

もにあつかう必要がある。池上曾根の復元案からは、そんな浅川の歴史観も、見えてくる。

宮本と浅川の建築史認識は、あいいれない。有史以前の日本にたいするとらえかたが、反対方向をむいている。そして、池上曾根の復元では、この対立がそのまま案化された。私は事態を、以上のようにとらえている。

個性かバイアスカ

現在、池上曾根遺跡は、その一部が史跡公園として整備されている。園内には、池上曾根弥生情報館と池上曾根弥生学習館も、もうけられた。考古学の愛好家をまねきいれる設備が、ととのつている。しかし、なんといつても、この目玉は、復元された大型建物であろう。棟持柱をもつ高床の巨大な建築が、園内にはたっている。それも、柱穴の見つかったもとの場所に、である。

そこで発掘された柱穴や柱根は、学習館のほうへうつされた。ほんものをおがみたい来園者は、そちらへゆけばよい。

なお、大型建物のデザインには、一九九七年の浅川案がえらばれている。伊勢神宮風の宮本案ではなく、南方を思わせるエキゾチックな姿で、建物は再現された。

はじめに、復元案を依頼されたのは、当時奈文研にいた宮本長二郎である。伊勢神宮めいたスケッチを宮本が発表したのは、このと

きであった。

しかし、宮本は作業のちゅうで、東京国立文化財研究所へ転出する。そのため、復元の仕事は、やはり当時奈文研に在籍していた浅川へ、ゆだねられた。

あとをまかされた浅川は、新しい南方的な復元図を提案する。そして、その新案にもとづいて、復元工事の作業も指導した。南方的に見える姿で、弥生の館がよみがえったのも、そのためである。

浅川が、先任者である宮本の案を、勝手ににぎりつぶしたわけではない。池上曾根の現場では、宮本案にあわない発掘成果もあがっていた。宮本案をそのままいかすのはむずかしいとする合意も、できている。宮本案が採用されなかったのは、そのためである。浅川が、自分の南方的な復元案でおしきりたかったためではない。

だが、現場の事情がのみこめない人は、またちがつたように事態をうけとめただろう。後任に指名された浅川が、これさいわいと自分の建築史観を、現場の復元班におしつけた。それで、伊勢風の案は南方的な案へ、さしかえられることになる。と、そんなふうには早とちりをしている人も、いたのではないか。

浅川案が発表されたその翌年、一九九八年六月九日のことである。日本建築学会は、建築会館で、建築の考古学的な復元に関する座談会をもよおした。

この座談会には、考古学者の金関^{かなせきひろし}恕もまねかれている。史跡池上

曾根遺跡整備指導委員会の委員長である金関が、ここへは招待されていた。

司会者には、建築史家の藤森照信と宮本長二郎が、えらばれている。池上曾根の復元案をしりぞけられた宮本が、司会役の一翼をになうことになったのである。

金関と宮本が顔をあわせ、建築の復元を語りあう。いつ、池上曾根が話題になっても、おかしくはない人選であったと言わべきか。そして、じじつ、池上曾根の大型建物をめぐっても、議論はかわされたのである。

話がそこへむかった経緯を、説明しておこう。考古学の発掘現場では、しばしばかつての建築を復元することがある。しかし、何を根拠にしてそのデザインがきめられたのかは、わからない。それではこまると、司会者のひとりである藤森が、まずきりだした。

これにたいして、考古学者の金関が、デザインをきめているのは建築史家だときりかえす。考古学者には、地面から上のことがわからない。だから、口もだせないのだと、応答した。デザインの責任は建築史家にあるというのである。

そんなやりとりのなかで、金関は池上曾根にも言及する。

私はいま池上曾根遺跡（弥生、大阪府）の整備の委員長をしているのですが、そこで大型の建物の柱穴が出てきて、まず最初

に宮本先生に復元プランをつくっていただきました。何か日本古代の神社の建物、あるいは正倉院というイメージでしたが、先生が今度転任されましたので、その続きを浅川滋男さんに指名されて、基本的にやり変えられました。そうすると今度は雲南省の民家のイメージです。¹

宮本が復元を担当すれば、日本的な建築になる。浅川にまかせれば、雲南省の気配がただろうというのである。

雲南省は、中国の南端に位置している。ラオスやベトナム、そしてミャンマーの北側にあたる。中国の、いわゆる少数民族が点在する地域である。そんな雲南のおもかげを、金関は浅川の復元から、読みとっていた。日本的な宮本案とはちがうエキゾチズムを、感じていたのである。

そして、そのことを金関は、いぶかしがる。あるいは、いぶかしがってみせる。なぜ、担当者がことなれば、復元もこれだけちがってくるのか、と。そして、その疑問を、やや意地悪く、座談会にでていた建築史家たちへこうぶつけた。

同じ柱穴から上部を建てられてこんなに違うのか。それとも設計される先生方それぞれの生涯の経歴、キャリアのようなものが反映して、全部バイアスが入っているのか、そのへんが非常

に面白く感じました。⁽²⁾

考古学をやる、考古学的に復元できる古代のイメージはこうであるという一種の教育があるじゃないですか。ところが建築史のほうは復元するときにただ歴史に忠実ではなくて、もって個性を出せという教育が日本の建築学にあるのではないか。⁽³⁾

建築史家の復元に、学術的な妥当性はあるのか。けつきよくみんな、自分の好みで勝手にやっている。自分の研究歴とあわせたようなデザインで、すませているんじゃないか。宮本案と浅川案のずれは、金関にそんな不審をいだかせたのである。

率直に書くが、私も宮本案のあとで浅川案を見たときに、似たような感想をもった。池上曾根の復元は、復元者の個性に左右されている。彼らは、それぞれ日本派、および南方派としての情熱を、復元にこめていた。そして、最終的には、日本派が南方派にとつかわられたのだ、と。

発掘現場に、宮本案をあきらめさせるような事情があったことへは、頭がまわらない。

ただ、両者のことになった建築史観が、もろに復元へ投影されたのだと、みなしていた。

そして、現場を知らない私などが、そう判断していたのも、無理

はない。なにしろ、池上曾根遺跡の整備にあたった最高責任者も、そう考えていたのである。まわりの野次馬たちが、同じように事態をうけとめたのも、やむをえないだろう。

あそびと創造力

建築史家たちは、けつきよく自分の趣味で復元をてがけている。縄文や弥生の建物は、どんな形になっていたのか。それを、学術的につきつめようとはしていない。そんなことよりも、デザインの好みを優先させる傾向がある。

金関は、一九九八年六月の座談会で、そうきびしく建築史家たちに、問いつめた。しかし、その同じ金関が、二年前の一九九六年には、またべつのことを書いている。二年後とはちがう見解をのべていた。

まだ、浅川の南方的な復元案は発表されていない。考古学者たちの前にしめされていたのは、伊勢神宮風の宮本案だけである。そして、その段階では、金関も建築史家、つまり宮本の空想的な復元を、肯定していた。

その具体的な書きっぷりを、紹介しておこう。まず、金関は宮本の復元図を、論文のなかにひきうつす。そして、この想像図を、つぎのように論評した。

挿図に掲げた上記の高床式大型建物……の復原案は、宮本長二郎氏によって示されたものである……その上部の構造が細部に至るまでこの通りであるかどうかは別として、ここに棟持柱を備えた高床式建物があつたことは確実である。⁽⁴⁾

金関の言うとおり、棟持柱のあとは地面にあいていた。しかし、建物そのものが高床であつたかどうかは、不明である。実証的にはたしかめようがない。

なるほど、池上曾根の現場は、高床説でまとまつた。だが、たしかな根拠はないのである。にもかかわらず、金関は書く。棟持柱をもつ高床式建築であつたことは、「確実である」と。そして、その点に関するかぎり、宮本案にあやまりはないというのである。

金関は、一九九六年三月二三日に、宮本長二郎と、その復元案を語りあつたらしい。そのさい、宮本はこう金関にもらしていたという。

批判が在ることは承知しているが、自分としては、発掘調査の現場で一つ一つの柱穴について可能な限り検討し、建物の存在を確信した。上部の構造の復原はあくまで一つの案である……発掘調査は予断をもつて行うべきではないといわれるものの、建物跡などの場合、知識や予断なしに掘るならば、微かな痕跡

を見逃すこともないわけではない⁽⁵⁾

このとおりに宮本がしゃべっていたのかどうかは、わからない。伝言ゲームによる誤差が生じた可能性は、あるだろう。

だが、とにかく金関は、宮本の復元案を「予断に」よるものとして理解する。「一つの案」でしかないことも、承知していた。建築史家の空想であることは、わかまえていたのである。

そして、そのうえで、金関は、これを積極的に肯定した。「宮本氏の考えも一般論としては首肯すべきことである」⁽⁶⁾と。

創造力をいかした復元でも、建築の場合は意義がある。宮本案に接した金関は、一九九六年にそう書いていた。そして、新しい浅川案（一九九七年）を見てからは、態度をかえている。一九九八年には、建築史家の空想性へ、皮肉と揶揄の言葉をつきつけていたのである。

池上曾根遺跡のすぐ南側に、大阪府立弥生文化博物館がある。弥生時代の遺品などを見せてくれる施設である。遺跡整備の責任者であつた金関恕は、その館長職もつとめている。

弥生文化博物館が発足したのは、一九九一年であつた。新しい博物館の設立を、大きく世にうったえかけるためもあつたのだろう。同館では、邪馬台国^{やまたい}における卑弥呼^{ひみこ}の居館なども、模型で復元させている。

もちろん、卑弥呼がくらしていた住居あとなどは、今でもまだ見つかっていない。一九九一年当時は、邪馬台国の所在地に関しても、議論がわかれていた。今日ほどには、大和の纏向が有力視^{まきむく}されているわけではない。

弥生文化博物館も、だからその場所をきめてはいなかった。具体的な特定は、ひかえている。ただ、卑弥呼と彼女をとりまく支配層のいとなんだ建築群だけを、想像で復元してみた。居館や倉庫、物見櫓、そして神殿などを、模型でこしらえたのである。

現在の考古学からは、こんな形が、卑弥呼の建築群として、イメージしうる。その一例を、ちょっとしたあそびのつもりでこしらえたということか。

ただ、模型群の背景をなす山の写真には、奈良の三輪山がえらばれていた。この展示は、だから邪馬台国の中心が三輪山のふもとにひろがることを、しめしている。つまりは、纏向がその所在地であったと、言外に語っているのである。

邪馬台国Ⅱ畿内説に、事実上くみしていたと言うべきか。「卑弥呼の館の所在地がどこと特定しているわけではない」。弥生文化博物館のそんな展示説明が、ややしらじらしく感じられる。

まあ、近年は邪馬台国を纏向にあつたとする説が、有力になっている。すくなくとも、考古学界の主流は、そちらへ傾斜した。同館の展示に、先見の明があつたといえなくはない。

いっそのこと、展示説明も、はつきり大和纏向説にかえたらどうかと思う。ただ、建築模型の配置は、纏向遺跡の現状とくいちがう。どちらかと言えば、佐賀にある吉野ヶ里を想わせる構成となっている。はつきり纏向説をうちだすのなら、その配置もかえなければならぬかもしれない。

ところで、それらの模型も、復元の指導は宮本長二郎にまかされていた。そして、宮本は、自分の建築史観にしたがつて、卑弥呼の居館などをつくっている。^⑦

高床建築の意匠には、ここでも伊勢神宮のそれがとりいれられた。とりわけ、神殿と称される施設の模型には、そのことを強く感じる。神宮の本殿から回縁をはぶいた形式が、そこにはもちこまれていた。あるいは、内宮外宮の東西両宝殿がと、言うべきか。

古墳期以前の高床建築を、伊勢神宮から逆算して想像する。この宮本流は、卑弥呼の館にも応用されていた。また、そうしてつくられた模型を、弥生文化博物館は目玉展示にしたてている。金関館長も、それを良しとしたのである。

建築史家の復元は、けつきよく想像の産物でしかない。史家の研究歴や個性で、いかようにもかわってくる。のちに金関は、そう建築史家たちをなじっていた。

その当人が、弥生文化博物館では、邪馬台国の模型復元に興じている。宮本長二郎の空想的な仕事を、自分の博物館で展示させてい

た。そう、金関じしんも、こういうあそびはきらつていなかったのである。どちらかと言えば、おもしろがれるほうの研究者であつたと、言つてよい。

なのに、浅川案が発表されてからは、建築史家の想像的復元へ、苦言を呈しだした。この経緯を見れば、金関の共感がどちらにあつたかは、明白であろう。池上曾根遺跡の整備委員長は、宮本案にしたいしみをいだいていた。そして、浅川の新提案にたいしては、これをにがにがしくながめていたのである。

もちろん、建築学会の座談会にでても、宮本の肩をもつような発言はしていない。かたや日本風、かたや雲南風。同じ柱穴から、研究者によつて、いろいろちがった復元ができるものですね。金関はそうからかいつつ、両者を公平に皮肉つた。

しかし、こういう口吻をもらしたのは、浅川の提案が世にでてからあとのことである。宮本案しかなかったところに、建築史家の空想性を批判したことはない。いや、むしろ宮本案にたいしては、その想像力を評価するような文章も、書いていた。

金関が、宮本案によりなじんでいたかどうかは、うたがえないのである。

座談会での金関発言にたいして、同席していた宮本は反論をしていない。「私は自分の設計が必ずしも百パーセント正しいとは思っていません。だからこそ反対意見を出してほしい」⁽⁸⁾。そうかえすに

とどめている。金関は、浅川にたいしてより批判的であつた。そんなこれまでのいきさつを、宮本が知っていたからだろうか。

だが、浅川滋男はがまんしきれなかった。翌々月の『建築雑誌』に、金関発言への抗議文をよせている。そのなかで、浅川は金関の言いたいことを、こう要約してみた。

浅川は、復元作業において個性を発揮するために、自分の研究経歴を活かして、雲南省の民家をイメージしながら設計を進め、純日本的な宮本案を潰してしまった、と言いたいわけである。⁽⁹⁾

この抗議を読んで、浅川のひがみすぎだと感じた読者は、いたかもしれない。座談会の金関発言は、浅川案のみならず、宮本案もひとしくからかっていた。浅川案だけをこけにしていたわけではないと。

しかし、私は浅川の指摘を、この点に関しては妥当であつたと考ええる。なるほど、建築学会での座談記録だけを読めば、金関は公平であつたように見える。だが、そこへいたるまでの金関が、両案をひとしくあつかっていたとは思えない。浅川により冷淡であつたことは、いなめないのである。

池上曾根の遺跡公園には、宮本の伊勢神宮をしのばせる弥生の館

が、たつはずであった。それなのに南方をフィールドとする浅川が、その予定をくつがえしてしまう。自分のキャリアを特権化して、南方的な案にかえてしまった。建築史家のがんこな個性には、手をやかされる。

以上のように当時の金関は、おそらく考えていたのである。すくなくとも、そう浅川に思わせてしまう経緯のあったことは、否定されまい。

精神的支柱

宮本長二郎の案は一九九五年に発表されたと、これまで書いてきた。しかし、この記述には、やや正確なところがある。ここまでは、話をとどこおりなくすすめて、便宜的にそうしるしてきた。これからは、事態の推移を、もうすこしいねいにおいかけたい。

池上曾根遺跡から、大型建物のあとがみつかった。弥生の神殿だったかもしれない。そう記者会見で発表されたのは、一九九五年六月一六日である。その翌日に、新聞各紙はこれをおおきくとりあげた。

記者発表の席には、建物の復元図もそろえておいたほうがいい。そう考えた地元、和泉市の教育委員会は、図案の作製を奈文研の宮本長二郎に依頼した。

あとでくわしくのべるが、宮本はこういった仕事をけっこうこな

している。考古学的な建築の復元では、名のおったベテランであった。和泉市が宮本を指名したのも、まずはそのキャリアを買ったことだろう。

ただ、この段階では、まだ柱穴の実像がはっきりつかみきれていなかった。十一本の柱が二列で対にならび、合計二十二本の柱で長方形平面を構成する。中央の棟筋には、四本の棟持柱が配置されている。あとではつきりするそんな実情が、まだわかっていなかった。このころに、長方形平面をかたどる柱の穴で、つきとめられていたのは二十本までである。言葉をかえれば、一列が十本、つまり桁^{けた}行^{ゆき}九間の建物だと、当初は想定されていた。

そのため、宮本も、十対の柱がならぶ九間だての復元図を、えがいている。そして、記者会見では、この図がそのままつかわれた。もちろん、新聞の紙面にも。

しかし、発掘現場では、このあとすぐに、もう一対の柱穴が発見されている。柱は十一対あったことが、あらたに判明したのである。宮本もこれにあわせて、復元図の柱をふやし、桁行十間の建物へあらためた。この宮本第二案は、九月二四日のシンポジウムにまにあわせて、つくられている。

どちらも床を高くあげた高床建築である。その床は七メートルの梁間をもつ横木で、ささえられている。対をなす柱は、七メートルの間隔をおいてたっていた。そこへさしわたされる横木も、とうぜ

ん同じ長さをもつことになる。

そして、横木は柱にあげられた貫^{ぬき}とよばれる穴で、柱へ固定されていた。その穴に、横木の両端をはめこんでいたのである。いわゆる大引貫^{おおびきぬき}の工法である。これで、十一本の横木Ⅱ大引きを、十一対の柱にさしこむ建物の骨組みが、できあがる。

七メートルにもおよぶ横木を支持するためだろう。横木はぶあつくなるし、とうぜん柱にあげる穴も大きくなる。必然的に柱も、太く設定しなければならなくなってくる。宮本の第二案が、直径七十センチの柱を想定したのは、そのためである。

十一月末からの調査で、しかしこの復元はなりたないことが、わかってくる。のこされた柱穴は、柱径が五十五センチ平均にしかならないことをしめしていた。宮本第二案の柱は、太すぎたことが判明したのである。

それだけではない。柱のなかには、直径が四十センチどまりのものもあった(柱十三)。三十センチしかない柱さえ、なかったわけではない(柱十四)。

そして、この二本は、あとであらたにおぎなわれていたことも、あきらかにされた。はじめにあった柱をぬきとり、柱の穴をほりなおす。そのあとへ、べつの新しい柱をうめこんだ。三十、四十センチ径の柱は、そんな補填品であつたことも、たしかめられたのである。

いずれにせよ、大型建物の躯体はけっこうきやしゃな柱で、ささえられていた。三十、四十センチの柱でももちこたえられるようなつくりになり、なっていたのである。

こうなると、宮本第二案がしめす大引貫の工法は、なりたちにくくなる。三十センチの直径しかない柱で、七メートルの梁間をもつ横木がたもてるとは思えない。この梁間にふさわしい貫の穴を、三十センチの柱にあげるのは、無理だろう。だからこそ、宮本も、その第二案では、柱の直径を七十センチにしていたのである。

だが、宮本はくじけなかった。翌一九九六年には、同じ工法の復元案を模型とCGで、つくらせている。七メートルの梁間を、三十、四十センチの柱でささえる、伊勢神宮本殿風の建物を。

図を見ると、細い柱に貫をあけて横木をとおしたところが、あぶなつかしくうつる。第二案の安定感とは、くらべるべくもない。こういうものがたっていたとは、思いにくいのである。

浅川滋男は、かねてより、この点で宮本案を批判していた。「直径三〇cmの柱に七mのスパンをとばす貫を差し込むのは不可能である⁽¹⁰⁾」。つとめ先の奈文研でだしている紀要にも、そんな言葉を書きつけていたのである。

建築学会へおくりつけた抗議文でも、この指摘はくりかえされている。のみならず、五十五センチ、つまり平均値の柱でも、貫の設定はむずかしいと論じていた。⁽¹¹⁾

おわかりだろうか。浅川は宮本の日本的な案を否定したかったから、それをおくらにしたわけではない。技術的になりたらず、発掘の結果ともあわないから、その実現を見合わせたのである。

宮本案は、一案から三案まで、いずれの場合でも、床から上に壁がたちあがっていた。柱と柱のあいだに横板をおとしこむかたちで、その壁は構成されている。柱と壁板を、たがいにくみこむ工法である。あるいは、柱と壁が一体化されていたというべきか。伊勢神宮の本殿、つまりは神明造のように。

こういうつくりだと、一部の柱をぬきとり、あとでべつの柱にかえるのは困難である。だが、じつさいには二本の柱が、とちゅうでさしかえられていた。そして、柱の交換ができた以上、宮本案のような構成であつたとは考えにくい。壁の横板を、柱が両側からはさみこんでいたとは思えないのである。

浅川は、この点でも宮本案を、否定的にあつかった。あれでは「二本の柱だけを差し替えるのは至難の技で」⁽¹²⁾ある、と。そして、建築学会への抗議文でも、全く同じ批判を反復した。⁽¹³⁾

まだある。発掘現場では、柱の穴が不均等にならんでいた。柱と柱のあいだは、けっこうまばらになっていたのである。そして、宮本案だと、壁の横板もそのばらつきにに応じて、きりそろえねばならなくなる。

なんとも、やっかいな工事である。弥生の人々が、はたしてそう

いう手間をかけただろうか。宮本案には、この点でも疑問がわいてくる。

もちろん、浅川は横板をめぐっても、宮本案を難じていた。そして、こういう問題点がぬぐいきれないから、浅川は宮本案を拒絶したのである。南方的な自案でおしとおしたいから、先輩の案をにぎりつぶしたわけではない。

そして、今のべた宮本案の問題点は、現場のスタッフもひとしくみとめていた。浅川だけが、感じていたわけではない。

ここに、『よみがえるいずみの高殿』という小冊子がある。和泉市の教育委員会がまとめた、大型建物の復元に関する報告書である。執筆を担当したのは、委員の乾哲也であつた。そして、乾も浅川のふれたような点が、宮本案では解決できなかったと書いている。

宮本案は、「構造上の大きな問題点が明らかに⁽¹⁴⁾なった」。「余りに合理的ではないように思われた」⁽¹⁵⁾。この冊子にも、そんな判断で宮本案をあきらめた経緯が、のべられている。

なお、これらの難点は、宮本第三案の模型を制作している過程で、表面化したという。部材をくみあわせていくうちに、これではだめだということになったらしい。

ともかくも、宮本案は、現場の状況にあわないから、とりきげられた。浅川が、日本より南方を重視する観念にもとづいて、否定したわけではない。宮本案だとうまくいかないことは、浅川以外のス

タツフも納得していたのである。

にもかかわらず、金関は事態の推移を、そうはうけとらない。日本派の宮本が、南方派の浅川にとってかわられたのだと、思いこんでいる。

そして、金関恕は池上曾根遺跡の史跡整備委員長であった。和泉市教育委員会の乾などは、金関のことをこうも評している。すなわち、「金関恕氏……は、復元プロジェクトチームの精神的支柱だった」⁽¹⁶⁾と。

浅川は、そんな「精神的支柱」に、揶揄されていたのである。金関の不注意な軽口に、抗議をつきつけたくなったのも、無理はない。つぎのような言葉を、金関へなげつけた気分も、よくわかる。

しかも、私と地元の若い考古学者たち、そして京都環境計画研究所が、この三年のあいだ苦心惨憺のうえ練り上げた復元案を揶揄しているのは、池上曾根遺跡の整備委員長その人であった。まったく、やっていられない。なさけない。⁽¹⁷⁾

おそらく、建物の復元をめぐる諸問題を、金関はあまり承知していなかったのだろう。現場の声も、じゅうぶんにとどいていなかったのではないか。そういえば、乾も金関のことを、「精神的支柱」であったと書いていた。言葉をかえれば、実質的な支柱ではなかつ

たかということか。

想いはアムール川の流域へ

宮本案には、さまざまな技術上の難点があった。発掘現場でわかってきた事実とも うまくかみあわない。復元案として採用されなかったのも、そのせいだと、ここまで書いてきた。浅川が自分の案でおしきりたかったせいではないことも、指摘済みである。

たしかに、宮本案はさまざまな問題をはらんでいた。第一案、第二案、第三案、いずれも、そのままではつかえない。しりぞけられたのは、やむをえないと私も考える。

しかし、宮本案の骨子をいかして、改良するてだてがなかったとは、言えまい。宮本は、伊勢神宮の弥生化をめざしていた。そして、このねらいを延命させることじたいは、可能だったろう。

宮本が、復元の手本にしたのは、伊勢神宮の本殿である。柱が屋根までとどく。柱と柱のあいだに板壁がはいる。柱には貫の穴をあけ、横木をささえる。そんな神明造から、宮本は弥生の館へさかのぼっていた。

くりかえすが、これだと池上曾根の発掘事情には、あわない。しかし、伊勢神宮と同じ形の屋根をもつふきさらしの建物では、どうだろう。神明造のかまえから壁板をはぶき、床板もとりのぞく。そうして、拝殿のようにしてしまうてだてはなかったか。

これだと、柱のさしかえもかんたんにできる。壁板のことも、心配しなくていい。柱の間隔がふぞろいなままでも、じゅうぶんたつ。

宮本案のころさしも、これならばたちえただろう。

池上曾根遺跡からは、高床建築らしい図像のぎざまれた土器片がふたつ見つかった。どちらも、側面の壁はえがいていない。柱が直接屋根をささえる構図になっている。屋根の下、柱の上に床はつてあったのかどうかは、わからない。

いずれにせよ、伊勢神宮風の壁は描写されていなかった。あらわされた建物は、その本殿のみならず、宝殿や御饌殿などもちがつている。そして、この点もまた、宮本案をしりぞけるひとつの手がかりになっていた。

もともと、土器絵画の建築図が、大型建物をしめしていたのかどうかは、わからない。べつの建物をえがいていた可能性も、じゅうぶんある。あるいは、空想図だったかもしれないのである。

だから、土器絵画は、伊勢神宮の形式をしりぞける決定的な論拠になりえない。あくまでも、伊勢の姿でおしとおすという選択肢は、ありえたらう。それに、神明造を拝殿風にしてしまえば、この土器絵画とも矛盾はしない。絵画と同じように壁の見えない建物を、伊勢風のかまえて復元する手はあった。

もちろん、宮本がこだわった本殿風の神明造は、なりたちにくからう。しかし、ふきさらして屋根をささえる形式は、否定しきれな

い。伊勢の気配をいくらかはのこした復元で、強引におしきるという手もあった。

にもかかわらず、後継者の浅川は、そうしない。先任者の宮本による伊勢風を、あつさり棚上げした。かわりに、南方の民族建築めいて見える自案で、復元作業をおしすすめたのである。

浅川も、自分の好みや建築史観で、宮本案をほうむったわけではない。宮本案をすてた背景には、やむをえない技術的な事情があった。

ただ、宮本案をリメイクしてその骨子をいかすことも、浅川にはできたはずである。宮本案そのものは、なりたたない。しかし、大型建物は、伊勢に先行するデザインをふくんでいた可能性がある。そのことを全否定しきる物証が、池上曾根の現場にあったわけではない。

だが、浅川は南方的なデザインで、復元をまとめている。やはりそこには、浅川なりの建築史観があったとみなすべきだろう。価値中立的な技術論だからあの形がえらばれたわけでは、けっしてない。

浅川が建築学会へむけて提出した抗議文を、もういちど読んでみよう。浅川は、そこで自分の復元案がもつ建築史的な意味を、こう論じている。

インドネシアからオセアニアにかけての海洋島嶼地域においては、たしかに私の復元案に類似する建物が存在する……私は池上曽根遺跡で出土した土器絵画のイメージに近づけようとして修正案を練り上げた。その結果が南太平洋の高床建築に類似するということは、むしろ系譜論的に重要な意味をもっている¹⁸。

現場で見つかった土器絵画にもとづいて、復元をこころみたら、はからずも南方的になってしまったという。この言辞を、私は額面どおりにうけとれない。インドネシア、オセアニア風にしたいという意欲も、はじめからいっていただろう。土器絵画が、その思惑に好都合だったという判断だって、あったと思う。

もちろん、浅川もそんな情熱に自分がかかっていたとは、書かない。弥生の館が南方の民族建築に、似てしまう。それは、建築史の必然的な結果であると、論じきる。

浅川はかねてから、高床建築の源流を中国の中東部、長江流域にあると考えていた。それが南下して、インドネシア、オセアニアへとひろがっていく。伝播の経路はわからないが、東方の日本列島にもつたわった。そんな見取図を、池上曽根で大型建物の柱跡が見つかる前から、いっていたのである。

弥生の土器絵画によくある高床建築のことも、同じひろがりのなかで位置づけていた。西南中国や東南アジアの青銅器にぎざまれた

家屋図も、同様である。そして、それらの画題となった高床建築は、今も南方に生きのびている。浅川は、東部アジアからオセアニアにまたがるそんな建築史を、構想していたのである。じじつ、一九九四年に書いた『住まいの民族建築学』では、こうも論じていた。

西南中国から東南アジアにかけての青銅器文化にみられる家屋図像は、先史・古代日本の家屋図像ときわめて密接な系譜関係をもっている¹⁹。

これらの高床建築の研究は、たんに日本内部の問題として把握されるべきではない……東アジアからオセアニアにかけての広大な地域を視野におさめながら、先史日本の高床建築を照射しなおす必要がある²⁰。

中国長江流域から、高床建築は各地へ伝播した。有史以前の日本列島へも、とどいている。インドネシアやオセアニアにもつたわった。のみならず、南方ではそれらが現存する。

そのため、弥生の高床も、南方などを視野にいれて考えねばならないという。日本の内部だけで想いえがくことはできないのだとも、提言した。

有史以前の高床建築を、長江起源というひろがりのなかで評価す

る。南方の民族建築も、同じ系統に位置づける。そんな建築史観をいただいた研究者が、池上曾根では復元にたずさわっていたのである。そして、この歴史観も、復元案にはとうぜん投影されている。そうみなしても、さほどのはずしていないだろう。

浅川滋男には、縄文時代の竪穴家屋を復元した仕事もある。岩手県御所野遺跡での作業である。学界では、画期的な復元として知られている。

じゅうらい、竪穴家屋の屋根はかやぶきで、復元されてきた。伝統的な日本の農家と同じ素材で、くみたてられてきたのである。しかし、浅川は、土ぶきの屋根で、御所野遺跡の竪穴家屋を、よみがえらせた。土屋根の上に草がはえるような姿で、縄文中期の家屋を再現したのである。

もちろん、土ぶきの屋根は、しかるべきうらづけもあって、えらばれた。勝手な思いつきで、土ぶきにされたわけではない。

御所野遺跡では、縄文期にやけおちた家屋の跡が、見つかった。しかし、それは消失しきっていなかった。なまやけの状態で、部材は見いだされたのである。

かやをはじめとする草ぶきなら、家屋はすぐにやけおちる。だが、ここではそうならない。「炭化材の残りがよく、全焼しない条件があった」ということは、逆に土をかぶっていたからだ⁽²¹⁾。そう判断したうえで、浅川は土ぶきでの復元にふみきった。

そのしあがりには、かなり自信をもっていたらしい。すくなくとも、池上曾根の大型建物よりは、「実証性」もあると考えていたようである⁽²²⁾。

そして、学界のなかでも、この復元を批判する声は、まず聞かない。学術的には、評価もされていると言っているだろう。御所野にかぎらず、竪穴の多くが土ぶきであったとする見解も、今は有力になっている。

ただ、一般人には、有史以前の家屋と聞けば、かやぶきのそれを連想する傾向がある。農家のルーツめいた姿を、これらの家屋にもとめやすい。

そのあたりへの啓蒙的な配慮もあつてのことだろう。浅川は、現存する周辺諸民族の竪穴家屋も、たいてい土ぶきであることを強調する。「民族誌からみた場合、竪穴住居の屋根はむしろ土葺が主流を占める」のだ、と⁽²³⁾。

そして、御所野遺跡での復元を論じた文章は、こんな一文でしめくくられていた。

築後一年を経た御所野遺跡の土屋根住居は苔むして草が生い茂り、筆者がアムール川の南岸でみた、ホジェン族の竪穴住居とよく似た相貌をみせはじめていた⁽²⁴⁾。

アムール川は、シベリア南東部から間宮海峡へながれこむ大河である。その流域に、今でも土ぶきの竪穴家屋をいとなむ部族が、あ
るらしい。浅川は、自分の復元を見おして、そんな部族の民族建
築へ想いをさせている。

やはり、浅川のなかには、日本と周辺諸民族をつなげたがる情熱
がある。建築の民族学的な調査をへて、両者の接点を肯定的に評価
する気持ち、はぐくまれた。そのことは、いなめないだろう。

そして、そんな想念は、池上曾根の大型建物へも、投影されてい
たにちがいない。

「真実は一つ」

池上曾根の大型建物を、宮本長二郎は伊勢神宮の本殿風に、よみ
がえらせようとした。そして、宮本がこういう復元をこころみたの
は、池上曾根だけにかぎらない。以前から、棟持柱をもつ高床建築
の復元をたのまれれば、宮本は伊勢風にまとめてきた。

一九八三年にてがけた松野遺跡での復元予想図が、その早い例に
あげられる。この遺跡で宮本は、高床建築二棟（SB〇五、〇六）
の復元図をえがくよう依頼された。そして、そのうちのひとつ（S
B〇五）を、伊勢風にしあげている。

なお、松野遺跡は兵庫県にある、古墳時代後期の遺跡である。
では、どうしてこのようなデザインが、えらばれたのか。復元へ

いどむその心得を、当時の宮本はこう書いている。「埴輪家等の古
墳時代の遺物および、現存の神社建築遺構を参考にして復元を試
み⁽²⁵⁾」た、と。

ここで、宮本が神社建築というのは、伊勢神宮と出雲大社、そし
て住吉大社のことである。これらの神社は、大陸からやってきた寺
院建築の影響を、あまりうけていない。必然的に、有史以前からつ
たわる建築の姿をとどめていると、宮本は考えた。神社を参考にし
ながら復元をすすめるのは、そのためだというのである。

そして、松野遺跡のSB〇五は高床建築で、独立した棟持柱をも
っていた。周知のとおり、出雲大社と住吉大社には、独立棟持柱が
ない。しかし、伊勢神宮には、それがある。

松野の高床（SB〇五）が、出雲や住吉ではなく、伊勢風に復元
されたゆえんである。棟持柱があつたのだから、伊勢風にちがいな
いという理屈である。宮本本人は、つぎのようにも書いている。

SB〇五は現時点では棟持柱を持った高床建築と確認できる唯
一の遺構であり、また、建築的に伊勢神宮本殿の祖型とも云え
る形式をもつ……⁽²⁶⁾

これ以後、棟持柱をもつ高床建築の跡が発見されるケースは、ふ
えてくる。そして、それらの復元をまかされた宮本は、みな同じよ

うに処理をした。どれもこれも、伊勢神宮の本殿をしのばせるように、しあげている。棟持柱があつたのなら伊勢風だという、例の理屈にしたがつて。

ついでにのべそえるが、それらの復元で宮本は伊勢の本殿にこだわった。御饌殿のデザインを、手本にしたことはない。このことは、弥生期や古墳期における「神殿」の問題と、密接なかかわりをもつ。神殿論へ言及する別稿で、本殿と御饌殿のことはくわしく検討しなおしたい。

ともかく、宮本はあちこちで、ブレ伊勢ともよべき高床建築像を、提唱した。そのため、宮本の仕事は、伊勢神宮の源流をさぐっているかのような観を、呈してくる。そのパターン化された復元は、一種の宮本銘柄としても認知されるようになってきた。

宮本じしん、自分の研究姿勢を、つぎのようにのべている。

私は、建築史研究者として伊勢神宮の社殿と式年遷宮が日本古代の建築形式や技術を忠実に継承していることに注目し、その成立時期と伊勢神宮に受け継がれるまでの経過を、考古学上の発掘調査資料から追いつづけている。⁽²⁷⁾

私は伊勢神宮の独立棟持柱をもった掘立柱の高床建築の源流を、建築遺構からずっと追っています。その一番古い例が……縄文

後期にさかのぼって成立した可能性がある。⁽²⁸⁾

伊勢神宮本殿の神明造は、七世紀末にとつぜんできたわけではない。じじつ、棟持柱をもつ高床建築の跡は、弥生時代や古墳時代にも、見いだせる。縄文後期にだって、なくはない。伊勢神宮の源流は、そんな太古にさかのぼれる。それを遡及することこそが、自分の使命にほかならない。宮本は、そう言いきっているのである。

しかし、棟持柱をもった高床建築なら、南方にもたくさんある。インドネシアやオセアニアには、今もたっている。これらは、有史以前の棟持柱をもつ高床建築の復元に、役立たないのか。

宮本を書く。それらは、あまりあてにならない、と。たとえば、つぎのように。

近世以後まで継承された民族建築は、必ずしも古代以前の全てを伝えているとは限らず、断絶した形式も多いと思われ、各時代の建築復元は、発掘遺構を詳細に検討し、僅かな痕跡も見逃すことなく解釈した上で、民族建築例を参考にすべきものと考えている。⁽²⁹⁾

周辺諸民族が今たてている民族建築に、二千年前の建築形式がのこっている保証はない。日本で有史以前の建築を考える場合に、こ

れを信頼しすぎることは危険である。参照は、副次的な範囲にとどめておくべきだと、言っている。

だが、伊勢神宮の本殿にも、後世の手が変形をくわえている可能性はある。今の建築が、七世紀の姿をそのままつたえているとは、言いきれない。弥生時代や古墳時代の建築が、現在の伊勢からさかのぼりうる保証は、ないのである。

にもかかわらず、宮本は棟持柱をもつ高床建築の形態を、伊勢から逆算する。今日の伊勢神宮は、古来の原型をとどめている。式年遷宮をへて、古式はまもりとおされてきた。その可能性に、宮本はかけているのである。

ともかくも、宮本は周辺地域の民族建築を軽視した。それよりは、伊勢神宮が伝える日本建築史の伝統を、重んじる。なかば確信犯的に、伊勢の原型を、縄文後期までさかのぼらせてしまうのである。

ただ、宮本も、棟持柱の形式を、日本のオリジナルだとは思っていない。東アジアのどこから「移入された」⁽³⁰⁾と、位置づけていた。

しかし、それが周辺地域での形式をそのままとめているとは、考えない。比較的早い段階で、日本化されたとみなしていた。のちの伊勢へつながる日本建築史の伝統へすぐに吸収されたと、判断したのである。

もつとも、そんな宮本も、縄文の竪穴が多く土ぶきであったろうことは、みとめていた。しかも、周辺諸民族とのかかわりで、土ぶ

き説を支持している。「北方民族の竪穴住居例は土葺きが主流である。だから、日本の場合も、「土葺きの可能性が大きい」⁽³¹⁾」と。

日本建築史の伝統は、縄文後期、弥生期にはじまると、考えていたのだろうか。この点に関する言及がないので、宮本の真意はわからない。ただ、日本固有建築の成立を、かなりはやい時期に想定していたことは、たしかだろう。

これにたいし、浅川滋男は、弥生の高床を周辺諸民族のそれに関連づけて、想像した。日本列島の建築文化を、東アジアや太平洋のそれに、とけこませようとしている。すくなくとも、宮本ほど、日本固有の建築という考え方には、こだわっていなかった。ふたりは、まことに対照的な建築史観をいだいていたのである。

一九九九年に、宮本は国立歴史民俗学博物館で、自分の研究成果を報告した。そして、そこでは、池上曾根でかわった大型建物の復元にも、ふれている。のみならず、浅川にたいしては、やや挑発的な言葉もなげかけていた。宮本は、自分の提案（第二案）と浅川案をくらべ、こううったえかけていたのである。

両案とも高床建築であるが、形式はまったく異なる。それぞれに言い分があり、私はもちろん自説を主張する根拠をもっている。建築史研究者が三人いれば三人ともまったく違う案が出る状況だが、真実の一つ、時が解決するであろう。⁽³²⁾

なお、宮本はのちに書いた本でも、浅川案の異国風を、批判的にとりあげた。自分は、伊勢神宮とのつながりを、より重視する。「その立場からは妥当性を欠く⁽³³⁾」と、言わざるをえない。以上のように、非難したのである。

金関恕が、池上曾根の復元で、建築史家をすこし見下したことは、すでにのべた。柱穴はひととおりしかないのに、担当者がかわれば、こうも復元案はちがうのか。そうあきれてみせつつ、建築史的な復元の非科学性を、なじったのである。

前にも論じたとおり、このとき金関は、復元作業の内実をあまりのみこんでいなかった。また、浅川にたいしては、やや不穏当な発言をしていたと思う。浅川が抗議をつきつけたのも、やむをえまい。

また、さきほどのべそびれたが、金関も、あとで謝罪文を書いていた。「金関の発言に不適切な表現のあったことを認め、浅川滋男氏にお詫び申し上げます⁽³⁴⁾」、と。自分の非を、ほぼ全面的にみとめてしまったのである。

余談だが、私はじかに金関と会って、当時のことを聞いている。浅川の抗議についても、たずねてみた。ことを穏便にすませたくて、とりあえず便宜的にあやまったのではないか。そんなうたがいの、心のかたすみにはあったからである。

しかし、あの件に関しては自分が悪かったという返事しか、かえ

ってこなかった。どうやら、金関はまじりつ気のない、本心からの謝罪を書いていたようである。浅川にたいしても、ふくむところは、何もないとのことであつた。

しかし、金関がしめした疑問の、その根本的な問題点はなくなる。「設計される先生方それぞれの生涯の経歴」によって、デザインがちがってくる。復元担当者のキャリアによって、表現にバイアスがかけられる。そういう側面のあることじたいは、否定しきれないのである。

もちろん、浅川にだけそう言いたいわけではない。宮本にも、同じ言葉はつきつけられるべきだろう。その意味では、やや軽はずみだった金関発言も、重くうけとめるべきだと、私は考える。

日本人の原風景

宮本長二郎は、一九三九年に生まれている。一九五六年生まれの浅川滋男は、だから宮本より十七年若い。建築史家としてのキャリアも、必然的に宮本のほうが、ずっと長くなる。

考古学的な復元の仕事にたずさわったのも、もちろん宮本のほうが早かった。浅川の場合は、池上曾根の大型建物が、その初仕事であつたと思う。

宮本は、その前から各地で同じような作業を、まかされていた。有史以前の建築を、図面として再現する。あるいは、発掘現場跡の

公園にたててみせる。そんな各地からの注文を、いくつもこなしてきたのである。

そして、宮本は考古学者たちから、そういう方面の第一人者だとみなされてきた。伊勢神宮風に復元された高床建築の姿も、すっかりおなじみになっている。宮本がかかわらないところでも、それがしばしば手本にされてきた。伊勢神宮を古朴によそった建築形式は、斯界における定番となっていたのである。

高床建築を南方風にイメージしたところのみ、すこしはある。池上曾根の浅川案に先行する復元図の製作例が、まったくなかったというわけではない。しかし、じっさいの発掘現場で、それが実現した例は絶無である。

多くの復元は宮本、もしくはその亜流がしあげていた。伊勢神宮を連想させるような形式も、ひろくとりいれられている。先史時代の建築は、日本建築の祖型めかして、各地で再現されてきたのである。

だから、池上曾根で浅川の南方的な大型建物がたつたときは、その衝撃も強かった。関係者の多くは、なじみのない造形に、おどろいたと思う。いや、違和感をいだいたむきもけっこういただろう。じっさい、そういう感情をあらわにした考古学関係者はすくなくない。たとえば、弥生期を専門とする高倉洋彰^{ひらあき}は、こう書いた。

「なんだか東南アジアの高倉をみるような違和感がある」⁽³⁵⁾と。「や

や行き過ぎの感じもしたが……荒唐無稽だと決めつけることはできない」⁽³⁶⁾。そうしるしたのは、朝日新聞の記者で、文化財を担当する中村俊介である。

もちろん、浅川はこういう懸念の声にも動じない。しかし、復元にたずさわった他のスタッフは、すくなくらず心配してもいた。地元の教育委員会に所属して、復元を担当した乾哲也の言葉へ、耳をかたむけてみよう。宮本案と浅川案は、一九九五年から一九九七年にかけて、発表されていた。二年間のあいだに、対照的な両者の案が、しめされたのである。そのことがひきおこしただろう反響を、乾はつぎのように対比させている。

伊勢神宮本殿などの古式の神社建築に通じ、日本人の心情にほどこくマッチしたその姿は、池上曾根遺跡の大型建物の復原イメージとして定着しつつあった。昨年、それとはかけ離れた復原案が公表された。ややもすれば「異国情緒」溢れる新しい復原案は、いさゝか奇異な印象を与えたかもしれない⁽³⁷⁾。

宮本の伊勢風は、日本人にしまれる。しかし、浅川のエキゾチックな提案は、うけいれにくいかもしれない。そう、当事者のひとは、のべている。

これは一九九八年の指摘だが、翌一九九九年にも、同じような言

及はくりかえされた。乾は浅川案を、こんなふうにも紹介したのである。

報道でその復元模型の写真を見られた方の中には違和感を感じたり、随分と思いつつたものを造るのだなあ、と思われた方がいたに違いない。⁽³⁸⁾

この建物の評価は別れるだろう。ややもすれば異国情緒溢れるその佇まいは、侘び寂びの世界とは対極にあるものかもしれない。しかし、思い切ったその造形は、復元史の一頁を飾るものと信じている。⁽³⁹⁾

わびさびという物言いは、日本的だとされる審美観のことをさしている。つくりが簡素だと言われる伊勢神宮のことを、まずこのいまわしで暗示する。そして、そのうえで、浅川案がちがう構成になっていることを、しめしていた。日本人にはなじみのない表現なので、評価はわかるかもしれない、のべながら。

なお、浅川案がひきおこすだろう違和感をのべた乾は、同時に宮本案をこう論評した。「伊勢神宮本殿の建築様式にも通じ、日本人の原風景に非常にマッチしたものだ⁽⁴⁰⁾」と。宮本案のほうが、日本人にはわかりやすいというのである。

乾は浅川とともに、池上曾根の大型建物を復元したメンバーのひとりであった。宮本案が、そのままでは採用しきれなかったことも、知っている。作業は浅川案の方向ですすむことを、納得していたはずの研究者である。

にもかかわらず、日本人の共感には宮本案のほうがよびやすいと、何度も書く。浅川案は、なじみにくいと、くりかえす。

ここで注目したいのは、和泉市の教育委員会が刊行した、復元に関する報告書である。なかでも、巻末の結語は興味ぶかい。「おわりに——復元事業の問題点」という、やはり乾哲也の書いた一文が、それである。

乾はそこで、大型建物の復元が絶対的ではないことを、強調する。とりわけ、再現された建物には、復元担当者の個性がにじみでいることを、力説した。たとえば、こんなふうだ。

二千年前にこのような形の建造物が実際に建っていたかどうかという判断は、いかに学問が進展しても結論は出ないのである。これは浅川滋男氏を中心とした、復元スタッフの個性が随所に現れた産物に他ならない。⁽⁴¹⁾

浅川たちの個性が、この建物をこしらえたのだと、この報告書は言いきっている。

まあ、そういう側面のあることは、否定しきれない。浅川案のみならず、宮本案にも担当者の個性は、色濃く投影されている。そもそも、考古学的な復元は、そういうものなのである。しかし、それを報告書の末尾で、こうも強調する必要はあったのか。

じつさい、池上曾根以外の報告書で、同じような筆法をとっているものは、あまりない。宮本長二郎の復元案を採用しているほかの報告書も、こういう釈明は書いてこなかった。

いや、池上曾根の報告書も、宮本案のことはこんなふうに論じていない。浅川の復元案にたいしてだけなのである。報告書で、個人的に上げられていると評されたのは。じつさいは、宮本案もじゅうぶん個人的だったのに。

「異国情緒」にあふれた浅川案が、それだけ反発をまねいていたということだろう。発掘現場の実情もあって、宮本案はうけいれがたくなっていた。それでも、日本的な表現の枠をこえた浅川案は、さまざまな抵抗と摩擦をひきおこす。乾のおよび腰と言っている書きぶりも、その必然的な派生物であったということか。

報告書からの引用をつづけたい。和泉市の教育委員会は、一九九五年の九月に、宮本の第一案をうけとっていた。その図面とであったときの感銘を、乾はこうつづけている。

この復元図は伊勢神宮本殿のような神殿風建築を夢想していた

我々にとつても、まさしく待ち望んだ復元案であつた。⁽⁴²⁾

伊勢神宮本殿風の建物を、彼らもまたのぞんでいたという。たまたま宮本にたのんだら、伊勢風の図案がかえってきたわけではない。宮本へ注文すれば、伊勢風になる。そのこともじゅうぶんわきまえ、なおかつそれをこころまちにしていたのである。

伊勢神宮の姿で、日本人の民族精神をくすぐる建築が、好ましい。遺跡の来訪者、つまり日本の善男善女には、それが好まれる。とまあ、そういった読みも、和泉市側にはあつたということか。宮本銘柄の復元が、全国で支持されている事情も、そこにあるのかもしれない。

そして、乾は浅川案を「待ち望ん」でいなかった。じじつ、浅川の「異国情緒」にたいしては、そういう言葉をむけていない。「待ち望んだ」と、わざわざ書いたのは、宮本案にたいしてだけである。もし、浅川が宮本案の難点をあげたらわなかったら、どうなっていたか。そのさいは、宮本案が修正をへて、たちあがっていたかもしれない。その技術的なほころびをつくらって、伊勢まがいの建築ができていた可能性はある。

とにかく、大勢が宮本びいきだったことは、まちがいない。一時期の金関恕が、浅川につらくあたったことも、そのことと無関係ではないだろう。

乾哲也は、宮本長二郎にたいして、こんな文章も書いている。その第一案を、記者発表までにしあげてくれたことへの謝辞である。

公務に忙殺される合間を縫って早速にもパースを描いてくださったのは、氏の古代建築に対する熱き探求心の賜物だと今でも感謝の念に耐えない。⁽⁴³⁾

せっかくえがいてもらったのに、最後は没にする。そのことへの申し訳なさもてつだって、こういう文章はつづられたのだろう。いずれにせよ、宮本案をおしむ心情が、そこにははつきりよみとれる。まあ、学界の先輩にたいする世わたり上の配慮も、なにほどかはあったのかもしれないが。

いっぽう、建設作業を指導した浅川の労は、さほどねぎらわれていない。「感謝の念に耐えない」という言葉は、もっぱら宮本へむけられていた。そして、できあがった大型建物を、乾がしあげた報告書は、こう論じていたのである。あれは浅川らの個性でできた建物だから、気をつけて見てほしい、と。

「日本人の原風景」にあう宮本案か、「異国情緒」の浅川案か。そのどちらが教育委員会などで好まれていたかは、明白であろう。関係者の多くは、一般的によるこばれそうな伊勢神宮風を、もとめていたのである。乾の言葉は、そんな周囲の気配を代弁してもいた。

どうやら、浅川はけっこう孤独な作業を、しいられていたようである。金関のからかいで、いかりの感情があふれたことも、ゆえなしとはしない。

役所の仕事

私的な感想を書く。私は浅川が設計した大型建物の模型写真を新聞で見て、新鮮な印象をもった。いままでの陳腐な伊勢神宮型とはちがう。海外の民族建築が参照されているらしい点に、大きな感銘をうけた。

そちらのほうが正しいと、そう思っていたからではない。とにかく、じゅうらいの日本的な伝統路線とはちがう何かが、浅川の提案にはある。それは、判でおしたような既成の宮本型にない、べつの可能性をしめしていた。浅川に感心したのは、もっぱらその点である。

だが、考古学者たちは、かならずしもそのあたらしさをよろこんでいない。いろいろしらべていくと、むしろ違和感をいだいているらしいことが、わかってくる。

なぜだろう。浅川は、けっこうおもしろいアイデアをだしている。検討にあたっている斬新な提案を、こころみていた。私は、そこに知的な刺激をうけている。なのに、考古学者たちは、私の好奇心をあまり共有していない。これは、いったいどういうことなのか。

浅川が建築学会へ提出した抗議文には、こんなくだりもある。

一年半ほど前、考古学の老大家T氏が、ある酒席において「なんやパプア・ニューギニアの土人の家か」と酷評したらしいのだが、そういう噂を聞いても、今回ほど腹だたしくはなかった。⁽⁴⁾

浅川の指導でできた大型建物を、ある考古学者は、「土人の家」と「酷評」したらしい。おそらく、この「老大家T氏」は、坪井清足のことであろう。酒席で悪口におよぶ「老大家T氏」という表記を見て、私はそう思った。

しかし、坪井ならば、浅川の新しい提案がもつ可能性を、おもしろがれるのではないか。若い世代の発想を、ただやみくもに否定するようなことは、あるまい。そんな疑問をいだいた私は、坪井に直接面会をもとめ、話を聞いている。

予想どおり、この「T氏」は坪井のことをさしていた。浅川の文章を読んだ坪井は、文中の「T氏」を自分にちがいないと、判断する。自分しかないだろう、と。

だが、その酒席で、パプア・ニューギニアと言った記憶はない。あのときは、インドネシアのスラウェシ島にある民族建築を、例示したはずである。ニューギニアうんぬんというのは、あやまってつたえられた情報であろう。

そう言いながら、坪井はさらに、こうつけくわえた。浅川は「酷評」と書いているが、そんなに悪く言ったつもりもない。むしろ、浅川の場合には、けっこう評価している。

もちろん、浅川の復元どおりだったかどうかは、わからない。しかし、弥生の高床がインドネシアあたりとつうじあっている可能性は、じゅうぶんある。浅川はいいところをついている。「酷評」というのは、誤伝であろうとのことだった。

ただ、金関恕に謝罪文まで書かせたのは、よくない。もつとうまいおさめかたもあつたのではないかと、坪井は言う。

そして、坪井が浅川を批判したのは、もっぱらその点であつた。大型建物の復元案については、むしろ肯定的に語っていたというのである。

誰かが、坪井の発言を浅川に、「酷評」だとねじまげてつたえたのだろうか。だとすれば、その伝言過程に、悪意があつたと、みなさざるをえなくなる。浅川の周囲には、坪井の評価を「酷評」へ歪曲させる土壤が、できていたのだろうか。

そういえば、ニューギニアとインドネシアが混同されていた点も、ひっかかる。その背景には、南方にたいする無理解も、あつたような気がする。

ニューギニアもインドネシアも区別せず、その家屋を「土人の家」でかたづけ。民族学的な関心をうとんじるそんな気配が、た

だよっていたのではないか。だからこそ、坪井の言葉も、「土人の家」という「酷評」にかえられた……。

考えすぎかもしれない。これ以上、浅川への伝言にこだわることは、ひかえておこう。ただ、坪井に「酷評」の意図がなかったことだけを、ここではしるすにとどめたい。

考古学的な復元のかかえる諸問題が、建築学会で語りあわれたことは、すでにのべた。建築史家の個人的な作品を金関恕がからかった、一九九八年の座談会である。その同じ場所で、金関は、もうひとつの刺激的な発言を、のこしていた。

縄文以来の堅穴家屋は、どう復元したらいいのか。じゅうらいは、草ぶきでてがけてきた。しかし、じっさいには土ぶきのものも多かったことが、わかっている。今後の復元は、どうあるべきか。

座談会が、そんな議論でわいていたときのことである。金関は、そこへつぎのような話題提供で、きりこんだ。

復元するときの施主さんは地方公共団体です。だから土葺での復元には反対するでしょうね。というのはいく人かは復元した史跡を一つのノスタルジーとして見るから、古い木造の建物と茅葺があれば、満足して帰る。それが土葺であつたら、こんなに異様な世界ではないはずだということ⁽⁴⁶⁾です。

復元工事に金をだす行政は、土ぶきの異様な姿を好まない。一般人のノスタルジーにうったえかける草ぶきを、よろこぶだろう。だから、土ぶきではなかなか復元家屋がたてられないという。

司会の藤森照信も、この発言に同調した。なるほど、土ぶきでは一般来訪者のいなくショックが、大きすぎる。「それでは議会は通らない⁽⁴⁶⁾」と、金関にあわせている。

そして、もうひとりの建築史家である山岸常人は、こうした議論に反発した。一般人のショックがあろうとなかろうと、復元者は学問的に最善をつくすべきである。議会がとらないからやめておく、行政がいやがるからひかえておく。そういう「発想こそが一番問題なんです⁽⁴⁷⁾」と、応答した。

金関も、もちろん行政の意向にあわせるべきだと、そう言っているわけではない。スポンサーの好みで復元がおしきられやすい現状を、なげいての発言ではあつたらう。あるいは、迎合を余儀なくされる⁽⁴⁸⁾ことが、自嘲気味に語られていたというべきか。

いずれにせよ、この金関発言は、たいへん重要である。復元といういとなみの、その勘所をついている。うけいれるにせよ、反発するにせよ、ここから背をむけるわけにはいかない。

考えてもみよう。いったい、なんのために、考古学的な復元はおこなわれるのか。どんな必要性があつて、古い建物は、よみがえらせられるのか。

現在の発掘は、建設工事の事前におこなわれるものが、大半をしめている。工事をはじめる前に、地面をほる、いわゆる開発前発掘が、たいへん多い。純粋な学術発掘は、ごく少数しかおこなわれていないというのが、現状である。

そして、開発前発掘でよい成果があがると、工事したいをとめることになる。場合によっては、遺跡として保存することが、きまったりもする。こうなると、当初の建設計画は、中止せざるをえなくなる。

もちろん、建設工事をうけおった業者は、不満の声をあげるだろう。地権者も、そうした事態はいやがるところ。いや、それどころではない。土地の有効利用という観点から、遺跡の保存に反対する者も、でてこよう。もっと役にたつものをつくれという世論だって、わきおこりかねないのである。

考古学側も、こうした要望に、あるていどはこたえなければならなくなる。遺跡として重要だから、空地のままほうっておくというわけには、いきにくい。

だからこそ、そういうところでは、しばしば遺跡の公園化がはかれる。遺跡公園として、社会教育に貢献する。来訪者が歴史のロマンをあげたい、なにほどかは得をしたような気にさせる。遺跡を、そういう場として設営しなければ、ならなくなる。その一手段として、かつての建築が復元されたりするのである。

考古学者のなかには、復元建築をわりきつてながめる者も、けっこういる。あんなのは、遊園地の施設とかわからない。一般来訪者によるこぼせるつくりになっていれば、ことはすむ。そんなふうに小聲でささやく考古学者は、すくなくない。

遺跡をまもる。考古学の学術資料を地中にそのままのこす。復元建築は、そのための道化役を演じてくればよいというのである。

もちろん、その声高に論陣をはる者はいない。だが、考古学界の底流には、そういう気分もまちがいにうごめいている。建築史家が学術的にはりきりすぎて、大衆の好みからうきあがることを、めいわくがる。できれば学術より、大衆性に配慮をしてほしいという期待があることは、うたがえない。

建築学会での金関発言からも、そんな考古学側の本音は、読みとれる。復元の裏面にはたらくポリティクスも、見えてくる。活字の表面にはなかなかうかびにくい、その意味では貴重な証言であつたと考える。

さて、浅川は池上曾根の復元で、学術的な正確さにこだわらたがった。そのため、一般には評判のいい伊勢神宮風の復元案を、とりさげさせている。そのかたくなさが、現場の考古学者からもてあまされた可能性は、あるだろう。

考古学者に、浅川の学問的な意欲がわからなかったとは言うまい。ただ、遺跡の整備には、文化庁から地元へ巨額の資金がおりてい

た。「古代ロマン再生事業」と、「歴史ロマン再生事業」の経費が、あてられていたのである。

「日本人の原風景」にあわせた宮本案を、うけついでくれば、ありがたいのだが。あれをすこし改良すれば、みんなうまくいくのに。宮本先生の面目も、つぶさなくてすむし……。とまあ、そんな気分が現場にできていたとしても、うなずけなくはない。

もつとも、今では浅川案の大型建物も、十年近くたちつづけてきたことになる。

目になじんだという考古学ファンも、大阪近辺ではすくなくないだろう。はじめて登場したときにいだかれたような違和感は、うすれてきたと思う。

二〇〇五年三月には、大阪府北部の交野市^{かたの}で、やはり弥生の大型建物跡が見つかっている。棟持柱をもつ、高床だと、とりあえず認定された建築である。

大阪府の文化財センターは、さっそくその復元予想図を作成した。興味ぶかいことに、ここでは、池上曾根の復元が、ほぼそのままとりいれられている。浅川の仕事を小型化させたような図案が、しめされた。

柱穴のならばかたが、池上曾根とよく似ているせいではあろう。しかし、以前はこれを「異国情緒」ゆえに、けむたがっていた。それを、そっくり踏襲したのである。

どうやら、府内では、これが参照にあたいる先行例へと、昇格したらしい。そして、前例さえあれば、自治体もそれを拒絶はしなくなる。場合によっては、うけいれるようになっていく。

二〇世紀末の浅川案が抵抗をうけたのも、まだ前例たりえていなかったせいだ。その点では、早くから復元の手本だとされていた宮本案に、一日の長があつたろう。文化財行政もまた、先例主義にたつ、お役所仕事のひとつであるということか。

地元の要望

何度も言うが、池上曾根遺跡にのこっていたのは、柱の穴である。そして、いくつかの穴からは、柱根のあとも見つかった。だが、地面から上の部材は、まったくでていない。だから、現場でつきとめられるのは、柱のならばただけである。地上の建築が、どんな格好をしていたのかは、誰にもわからない。

にもかかわらず、池上曾根の現場では、これを高床建築であつたろうと判断した。屋根裏があつて、そこは地面から床板でへだてられていると、きめつけたのである。地面より高いところへ、床がはつてあつたかどうかは、確認できてもないのに。

そう、じつさいには、床がなかった可能性もある。地面の上にあるのは、柱と屋根だけだったかもしれない。ふきさらしの、わたり廊下然とした空間ができていたということも、じゅうぶんありうる。

あるいは、屋根だけがうかんでいる公園内の休憩所あたりを、想像してもらってもかまわない。

弥生時代や古墳時代の土器および銅鐸には、しばしば家屋の絵が、えがかれている。柱の上に台形の軀体をのせたような図像を、よく見かける。

垂直の壁をあらわしているとはつきり断定できる絵は、あまりない。もちろん、香川県から出土したとつたえられる銅鐸の家屋図をはじめとする例外はある。この絵は、直方体の小屋が柱でもちあげられた様子を、たしかにえがいていた。

こういう例がわずかでもある以上、宮本案の伊勢神宮風もむげには否定しきれない。壁をまつすぐにたちあげた高床建築も、たっていた可能性はある。しかし、これが主流をなしていたとは思えない。家屋図の残存状況にかんがみれば、あまり類例のない形式であったとみなせよう。

なお、池上曽根の発掘現場からは、二種類の土器絵画が見つまっている。一九九六年に発見されたものと、もうひとつは一九九七年にほりだされたものである。

前者は、側面図で、九対以上の柱をえがいていた形跡がある。また、棟持柱もそえた姿が、そこには描写されていた。

大型建物は、十一対の柱をもっていたことが、わかっている。もちろん、棟持柱もそこにはそなわっていた。その点では、一九九六

年に見つかった土器絵画と、つうじあう。

そのため、現地の復元班は、この図像が大型建物の実像をうつしているとは仮定した。いちおうそうかりにきめることで、作業をすすめていったのである。

はじめてふれるが、宮本案をしりぞけた背景には、この発見もあった。見つかった土器絵画には、弥生期の通例で、壁がえがかれていなかったのである。それは、柱の上へ、屋根がそのままの格好になっていた。横板で壁面をたつぷりとつた宮本案は、この点でもふさわしくないとされたのである。

なお、土器にきざまれた側面図の屋根は、上底のほうがひろがる台形になっている。いわゆる船型屋根である。左右の妻側がかたむく、妻ころびとよばれる状態で、描写されていた。

浅川案が、船型の屋根をとりいれたのも、この土器絵画にならつたためである。けっして、インドネシアあたりのそれをまねたからではない。まあ、南方の民族建築とよく似ているから、この建築図がえらばれたのかもしれないが。

さて、土器絵画は、建物の側面をえがいている。しかし、これだけを見ていても、床があつたのかどうかは、判然としない。屋根裏の部屋があつたのか、ふきさらしだったのかは、不明である。

現場の考古学者たちは、しかしこの絵が床もえがいていると判断した。絵のなかで、屋根の下端がとびだしているところを、床の表

現だと読みとつたのである。⁽⁴⁸⁾⁽⁴⁹⁾

そう言われれば、そのように見えなくもない。しかし、やや強引な判定ではある。この土器図だけから、床があったとするのは、むちゃだろう。

浅川滋男じしんは、これを高床建築ととらえていなかった。ふきさらし、四面開放の平屋建築だと、現場では主張したらしい。そうとなえるにいたつた理由を、同じ現場にいた乾哲也はこう書いている。

民族例ではムラの最大級の建物は集会所や共同作業場である事例が多く、それには四面開放の平屋建物がもっともふさわしい。氏は……この建物に多目的な集会所のイメージを描かれ、平屋を主張されたのだ。⁽⁵⁰⁾

屋根の下は、柱だけがあつて、ふきさらしになっている。そこへ、集落の人々があつまり語りあう。作業をする。浅川は、大型建物にそんなイメージをいだいていたという。

だが、現場の大勢は高床の建物をもとめていた。土器絵画の描写が、それをかすかに暗示していたせいだけではない。彼らの多くは、この大型建物を、一種の宗教的な施設だとみなしていた。内部で儀礼をおこなう、神殿めいた建物だったと、考えていたのである。床

をはつて、内部空間をこしらえたいと思ったのも、そのためであった。

浅川は、神殿論にくみしない。しかし、最終的には、高床案をうけいれている。床をはつたほうが、地震や台風にたいして強くなる。この構造的な判断から、高床案で手をうった。

ほんとうは、最後まであらがいたかつたのだと思う。しかし、四面開放の平屋案では、なかなか全体の合意がえられない。そのため、やむをえず、高床案へあゆみよる。そして、この妥協を、建物の強度も高まるからと自らに言いかせ、納得したのでらう。

浅川は、全体の意向へあわせた事情を、奈文研の紀要論文でつぎのように書いている。

それは、何より「高床」の「神殿」系施設という復原建物のイメージを損ねたくないという意見が強かつたからだが、筆者もまた台風や地震の対策を考慮し、天井に床を張るほうが有利だと判断した。⁽⁵¹⁾

では、誰がおもに、そういう「意見」を「強」くうったえたのだろうか。建築学会への抗議文では、そのことがよりはっきりと、示されている。

四面開放の平屋建物もしくは屋根倉形式の高床建物のどちらかということになる。私は前者に近い復元像を描いていたのだが、地元の要望は違っていた。宮本氏の復元案が築きあげた「高床」の「神殿」施設というイメージを損ねたくないという意見が強かったのである。私は研究レベルでは、この「神殿説」を批判している。⁽⁵²⁾

「地元の要望」であつたと、浅川は言う。さらに、奈文研の住居シンポジウムでは、こんなふうにもおべていた。「事業の主権者側が高床形式を好んだ」⁽⁵³⁾からである、と。

和泉市の教育委員会に所属する乾哲也も、高床説をとっていた。浅川へ高床説をおしつける側のひとりであつたと、言つてよい。その乾も、高床案が決定された背景には、つぎのような事情があつたと、書いている。

より権威的な高床式建物を望む声が地元が強かつたこともそれを決するひとつの原動力となつた。建物の性格を厳密に検討した結果の学問的決着ではなかつたという点に、すっきりしない印象を与えるかもしれないが、決め手がないというのが率直なところだつた。⁽⁵⁴⁾

多岐にわたる検討を加えても結論は出ず、最終的にはより立派に見えるという点と、復元の構造上、天井（床）を貼ることで強度が増すという観点から、屋根倉形式の高床建物として復元することに決した。⁽⁵⁵⁾

地元の事業主体は、りっぱな建物をもとめていた。神殿めいて見える偉容を、ほしがつていた。そんな要望にもあとおしされて、高床案はえらばれたのだという。四面開放の平屋案は、みおとりがするため、うけいれられなかつたらしい。

スポンサーは、せっかく大金をつかうのだから、見ばえのいい建物をたててほしいと思う。建築史家は、こういう要請を拒絶しきれない。政治決着めいた部分も、のみこまざるをえなくなる。それが、考古学的な復元の、平均的な実態であるのかもしれない。

池上曽根遺跡の大型建物は、こうして高床に復元された。その天井裏には、かなり巨大な空間が、つくりだされている。床板には、なんと八センチものあつみがある。

いくらなんでも、弥生人が八センチはばの板を、こうもたやすくはきりだせまい。じつさい、「床の形状について浅川氏は最後まで反対だつた」⁽⁵⁶⁾という。これも地元の希望をうけいれた、「立派に見える」工夫の一例ではあつたらう。

少々、高床での復元につめたく書きすぎたかもしれない。あとひ

とつ、土壌のぐあいについてもふれておく必要は、あるだろう。

弥生期に大型建物のたつていた土地は、しめっぽくなっていたらしい。そして、高床建築だと、湿気をさけることができる。もちろん、それが高床説をささえる証拠になりうるわけでは、とうていない。しかし、いくらか高床説に有利なデータでは、あるだろう。

「これを高床式とみるのは、立地する土壌が湿っぽい、というただ一つの理由による」⁽⁵⁷⁾。高床説に否定的だった浅川も、そうみとめてはいる。

しかし、湿気がある土地の一面を、そこだけ屋根でおおっていた可能性も、あるだろう。ようするに、高床がえらばれた最大の要因は、スポンサーの意向であつたと言うしかない。

弥生か古墳か

池上曾根で復元された大型建物の、外側へかたむいた屋根を、妻側から見てほしい。そこには、けっこう大きな破風板^{はふ}が、そえられている。

古墳時代の埴輪家には、こういう破風板をそなえた実例が、いくらかある。おそらく、それを手本にしたのだろう。しかし、弥生時代の建築に、こういう大がかりな装飾があつたかどうかは、不明である。その存在をしめす考古学的なデータは、ただのひとつも見つかつていない。

復元建物の屋根は、その棟、てっぺんにも長大な板かざりがのせられている。障泥板^{おとりい}である。これも、弥生期からあつたという根拠は、どこにもない。破風板と同じで、古墳時代の埴輪家にはあるが、古墳時代の建物を復元するのなら、可能性のあるデザインだと思う。破風板も障泥板も、りっぱすぎるが、こういう板の存在じたいは、否定しきれない。

しかし、弥生時代にふさわしい建築形式だとは、言えないだろう。どうして、弥生を代表する池上曾根遺跡で、こういう古墳的な造形がえらばれたのか。

しかも、復元された破風板などには、銅鐸絵画めいた図像も、えがかれていた。けっこうはでな色に、そめあげられてもいる。なぜ、こういう板を建物にかざりつける必要が、あつたのだろう。

乾哲也の報告書は、その理由をつぎのように説明する。

この建物が倉庫や集会所ではなく、首長権力にも直結する特殊な機能を兼ね備えた建物であるということを表現するために、棟に障泥板と千木を載せ、蟻場を破風板で覆うことによって、建物の特殊性を表そうということになった。時代は下るが、破風板や障泥板は家形埴輪の表現にはしばしば見られるものである……装飾的にも建物の権威を示す適切な装置と言え、これらを弥生の建物に慣用しても、荒唐無稽とは言えない……⁽⁵⁸⁾

それらもまた、建物をえらそうに見せる演出のひとつであったという。首長権力の特権性をあらわすためのしるしとして、破風板などはとりつけられた。

宮本案が採用されておれば、こうした細工を弄する必要も、なかったろう。伊勢神宮に似たその表現は、それだけでなにほどこかの威光をしめしえた。はでな破風板を、わざわざかざりつけることは、なかったはずである。

しかし、浅川の南方的な案には、神殿めいた偉容が不足している、と考えられていた。華麗な屋根かざりが、いくつもそえられたのは、そのためだろう。

もちろん、乾たちもそれがあぶなっかしい選択であることは、知っていた。「これらの装飾を施すことはひとつの賭けでもあった」と、当人じしんが書いている。「復元事業の中で、もつとも実証性の低い『遊び』の部分がこの装飾であつた⁽⁵⁹⁾」、とも。

浅川は、破風板などの装飾を、快く思っていなかった。それはそうだろう。そもそも浅川は、「研究レベルでは、この『神殿』説を批判していた」。大型建物のこと、作業場が集会場だと、みなしていたのである。神殿めかすための外装を、肯定的にうけいれるはずがない。

そのあたりのことを、乾は以下のように書いてもいる。

これはある意味では考古屋の遊びの部分である。浅川氏は少し顔をしかめておられたが、結局考古屋の情熱に押し切られる形でこれらの付属物が建物に加わった。⁽⁶⁰⁾

さきほどのべたが、一九九七年には、もうひとつべつの土器絵画も、見つかっている。そして、こちらでは屋根の両端に、母屋^{もや}桁^{げた}の先っぽめいた部分がえがかれていた。言葉をかえれば、破風板は存在しなかったかのような表現に、なっていたのである。

ただ、こちらの土器絵画では、建物をささえる柱が四本しか、しめされていない。多目にみつもつても、四対の八本までである。おまけに、棟持柱も描写されてはいなかった。

だから、これにもとづいて大型建物の復元を考えると、いうわけには、いきにくい。じつさい、池上曾根では一九九六年発見の絵画を、その手本にしていたのである。

にもかかわらず、浅川は一九九七年のほうにも、こだわった。それが破風板を拒絶する論拠になりうると、考えたからである。あるいは、われにもすがつたのだと言わなければならない。浅川が建築学会へおくりつけた抗議文には、こうある。

新発見の建物画を観察すると……破風板はなかったことになる。

私はこの事実を重視し、破風板をはずすか、少なくとも寸法を大きく減じてほしいと主張したのだが、その願いは受け入れられなかった。⁽⁶¹⁾

破風板には、ずいぶん抵抗していた様子が、わかる。「浅川氏は少し顔をしかめておられた」と、乾は書いていた。だが、「少し顔をしかめる」というていどの反発では、なかったようである。

いずれにせよ、浅川の「主張」はしりぞけられた。また、浅川じしんも、最終的には破風板などを、うけいれている。そして、自分の反論が拒絶された事情を、こんなふうにも書いた。

それまでに膨大なエネルギーを費やして破風板、障泥板、腰板の意匠を検討してきたことと、どうしても建物の華やかさを誇示したいという地元の熱意があったからこそ拒否だと私はうけとめている。⁽⁶²⁾

またしても、「地元の熱意」であった。建築の復元担当者も、なかなかこれには抵抗しきれないということか。

乾は、「考古屋の情熱」が浅川をおしきつたと、のべている。だが、どうやらその実態は、「地元の熱意」であつたらしい。

ついでにのべるが、破風板のとりつけ作業は、困難をきわめてい

る。けっきょく、職人の手仕事では、屋根先にすえることができなかった。最終的には、クレーンをつかって、もちあげられている。弥生の館なのに、現代の機械技術をもちこまなければ、たたなかったのである。

「大工さんたちの嘆息とともに『弥生人には無理だなあ』というつぶやきが聞こえた」⁽⁶³⁾。乾は、作業をおえたあとの現場にただよった気配を、そうもつたえている。池上曽根では、弥生時代だとありえない装飾を、復元してしまったのである。りっぱな建物にしたいという情熱のあまり、無理をしてしまったと言うしかない。

浅川の抗議文には、こうもある。浅川のいだいたであろう無念の想いが、よくわかる。

本音を言うと、今の破風板は大きすぎる。大きすぎるから、古墳時代の埴輪家のような臭いがしてしまうのである。それに、この派手な破風板さえはずしてくれば、「パプア・ニューギニアの土人の家」などという非難を浴びなくても済むのだけだ⁽⁶⁴⁾ど……。

浅川にも、妥協を余儀なくされたところは、たくさんあった。けっして、自分のたてたいものを、思いどおりにたてていたわけではない。

にもかかわらずと言っている。乾の報告書は、巻末にこんな弁明をそえていた。「これは浅川滋男氏を中心とした、復元スタッフの個性が随所に現れた産物」だ、と。

この書きっぷりだと、少々浅川に気の毒な気がする。浅川には、自分の我をおさえたところもあった。乾をはじめとする「地元」や「考古屋」の個性に、席をゆづった箇所も、ないではない。だが、個性的な表現はみな浅川がもたらしたかのように、書かれてしまうその点では、同情を禁じえない。

もちろん、乾も浅川だけに、その責任をなすりつけてはいなかった。浅川を中心とする「スタッフの個性」があらわれたと、乾は書いている。乾をはじめとする浅川以外の面々も、それぞれの個性を發揮していた。よく見れば、そうも読みとりうる記述にはなっている。

しかし、ざっとながめたただだと、「浅川滋男」の名前しか目にはいらない。やはり、いささか不公平な記述だなと、思ってしまう。浅川が気の毒にうつるゆえんである。

船型屋根は何をしめすのか

池上曾根に復元された弥生の館は、背が高い。屋根裏の頂部をささえる棟木は、地上から九メートルのところに、もうけられている。外観では、てっぺんの高さが十一メートルにもたっしているだろう。

船型屋根の大きさも、特徴的である。側面からながめれば、屋根ばかりがめだつ建築になっている。じつさい、棟持柱の長さは、十一対ある側柱の倍以上あるだろう。軒から棟までのほぼは、側面図だと側柱の三倍ちかくもあることになる。

弥生時代の建物をえがいた土器絵画は、たくさんある。しかし、これだけ屋根を大きく描写した例は、あまりない。

池上曾根で見つかった土器絵画の家屋図は、比較的屋根の割合が大きいほうだろう。しかし、それでも屋根へさかれた部分は、柱と同じぐらいにしかない。屋根対柱の配分比は、一対一である。だが、復元建物ではその比率が二・五対一、あるいは五対二ほどになっている。

一九九六年に見つかった土器絵画が復元の手本となったことは、何度ものべてきた。しかし、復元された屋根は、土器絵画のそれより、ずっと大きくなっている。これは、いったいどういうことなのか。なぜ、屋根に関しては、土器絵画の家屋図を逸脱する造形が、採用されたのだろう。

ここにも、地元の要請が反映されている可能性はある。なるべくりっぱなものをというもとめに、大きな屋根でこたえていたのかもしれない。

乾哲也の報告書は、近くから見たときの印象を、理由にあげている。つぎのように。

この復元の比率は、建物近くに立ち、それを見上げる形で建物を見たときに屋根と柱の比率が一对一に見えるようにしている。見上げた場合の威容が建物絵画の屋根と柱の比率に反映されるように設計したのである。⁽⁶⁵⁾

たしかに、建物のそばへよれば、眼前の柱がいちばん大きく見える。遠くから見たときほどには、屋根も突出してうつらない。この復元でも、近くからなら一対一でいどにみえるという理屈は、いちおうなりたつ。

しかし、この論法を他の遺跡でも採用すればどうなるか。高床の復元は、のきなみ現状のそれより、屋根を拡大しなければならなくなるだろう。

そして、そこまでの覚悟が、池上曽根の乾たちにあつたとは思えない。仮定の話だが、宮本案を採用しておれば、こういう理屈はもちださなかつたろう。これもまた、浅川案をよりかがやかせたいという欲求のたまものだったということか。

建築史家の浅川滋男は、さまざまところで、地元の要請と対立しあつてきた。復元建物をおおげさにしたがる注文には、抵抗の姿勢をしめしている。心ならずも、妥協を余儀されたことだつて、まああつた。

しかし、屋根の拡大化ということに関しては、あらがった形跡が見られない。わりあいすんなりと、これをうけいれていたようである。

もちろん、浅川は神殿説に納得していない。神殿めかそうとする過剰な細工には、不快感をしめしていた。基本的には、集会所、作業所として、この建物のこともとらえてきたのである。

だが、地元は神殿のように見える建築をもとめてきた。そして、浅川もこの要求をのんでいる。面従腹背と言つてもいいような気持ち、を、いだきつつ。

浅川が勤務先の奈文研で、復元に関する論文を書いていたことは、前に紹介した。そのなかに、インドネシアの船型屋根がもつ象徴性へふれたくだりがある。

いわく、東南アジア島嶼地域には、高床建築のシンボリズムがゆきわたっている。天井の下を地上界、上を天上界とする観念が、広く分布する。

さらに、船型屋根は、死者の魂をのせた船の暗喩でもあるという。鳥のように空をまう霊が、なかにいる。いわゆる鳥船の象徴に、船型屋根がなっていると、浅川はとらえていた。霊魂を太陽、天上へはこぶ交通手段としても、ながめうるといふのである。

そして、そう論じつつ浅川は、池上曽根での復元構想を、こうも語っていた。

池上曾根遺跡の大型掘立柱建物の復原にあたっても、「太陽にむかう船」としての舟型屋根の象徴性を強調してみることにした。⁽⁶⁶⁾

じつさい、復元された大型建物の頂部には、二羽の鳥がおかれている。木彫りの鳥像が、左右にのせてある。文字どおりの鳥船として、この屋根は構想されることになった。屋根が肥大化して、船型屋根になったのは、そのためでもある。

地元の要請で、ふきさらしの平屋根案はしりぞけられた。床をはった、天井裏が内部空間になる高床建築を、つくられることになる。のみならず、象徴的な表現も、彼らはもとめてきた。

ならば、東南アジア島嶼地域にもつうじるシンボリズムを、あらわそう。鳥船をしめす船型屋根の形に、まとめてみせようじゃないか。そんな想いも心中にはあつて、復元案はかたちづくられたらしい。屋根が肥大化していったのは、そのためでもあった。

地元だけが、大きな屋根をもとめたわけではない。それは、浅川の建築史観にもあつていた。いや、ひょっとしたら、屋根の膨張は、浅川のほうからもちかけていたのかもしれない。

他の復元スタッフが、浅川の建築史観を共有していたかどうかは、疑問である。乾の書いたものを読むかぎり、そこに共感をよせてい

たとは思えない。

ただ、浅川の船型屋根案は、とりあえず宏壮に見えた。これならば、りっぱな建物をほしがる地元とも、おりあいがつけられる。ちかくでながめれば、土器絵画にあつていう理屈も、ひねりだせなくはない。柱の二・五倍にもおよぶ屋根の案は、こうして全体の合意をかちとつたのだろう。

だが、ほんとうに、これで問題はなかったのだろうか。

大型建物の柱穴からは、合計四本の棟持柱があることも、わかつていた。屋外の左右で棟木をささえる独立棟持柱が、二本ある。あとの二本は、屋内から棟木を支持するそれである。

屋内にあつた柱穴二十三番の棟持柱は、しかし直径が四十センチしかなかった。これだと、地上九メートルの位置にある棟木をささえるには、細すぎる。しかも、棟木は全長三十メートルにおよんでいた。とうてい、力学的にもたない。

けつきよく、復元の現場では、この棟持柱を太くした。直径を六十センチにふくらませている。柱穴がしめす寸法には、目をつぶって、太い柱をこしらえた。そうしなければ、頂部の棟木に対応させられなかったからである。

ひょっとしたら、弥生の館は、もっと背が低かったのではないか。今の復元ほどに大きな屋根は、いただいていなかったかもしれない。でなければ、柱穴二十三の柱で建物がささえられるはずもないだろ

う。船型屋根は、なるほどりっぱに見える。しかし、その復元は、根本的にまちがっていたのかもしれないのである。

乾の報告書も、この点はすなおにみとめている。「復元そのものが間違っていると指摘されても致し方ない部分がある⁽⁶⁷⁾」と。

浅川はこの点についての言及を、しかしさけている。すくなくとも、大々的に論じようとはしていない。隠蔽するつもりかと、かంగりたくもなってくる。

宮本第二案は、側柱の直径が七十センチにそろえられていた。しかし、じつさいには、四十センチの柱や三十センチの柱もあったことが、わかっている。浅川はそのことを問いただしつつ、宮本案をしりぞけた。

だが、その浅川も、宮本と同じようなことをやっている。弥生期には四十センチしかなかった棟持柱を、六十センチにかえさせていたのである。その巨大な船型屋根をたもたせるために。これでは、宮本のこともなじめないと思うのだが、どうだろう。

浅川は、建築史家としてできるだけ誠実に、ことへあたろうとしていた。合理的に復元をすすめようと、努力している。また、じゅうらいの宮本案とはちがう新機軸を、学界へ提唱していた。それらの点は、じゅうぶん評価しうると考える。

しかし、その浅川にも、自分の夢を先行させたがる部分はあった。東南アジアにもつうじる船型屋根で、復元をおしきりたい。高床案

をひきうけた時点で、浅川はそうもくろんだ。そして、棟持柱がもっと細かったという事実からは、目をそむけたのである。

堅実な学問をこころがける研究者にも、ある種のファンタジーが脳裏をよぎることはある。その誘惑にまけて、実証性をおろそかにすることも、ないではない。学問といういとなみの、誰もがおちこむおとし穴なのだろう。浅川ひとりを、このことでせめようとは思わない。

いずれにせよ、池上曾根の建物は、もうすこしじんまりしていたようである。あんがい、浅川が最初に言っていた、四面開放の平屋だったのかもしれない。

なお、本稿はいずれ刊行される伊勢神宮論の一部をなすものとして、書かれている。

注

(1) 金関恕発言「建物復元にどのような原理原則が求められているか」『建築雑誌』一九九八年九月号 四五ページ。

(2) 同前。

(3) 同前。

(4) 金関恕「池上曾根遺跡で見いだされた大型建物の宗教的性格について」『ヒストリア』第一五二号 一九九六年 三一—三二ページ。

- (5) 同前。三二ページ。
- (6) 同前。三三ページ。
- (7) 宮本長二郎「卑弥呼の館の復原」大阪府立弥生文化博物館編『弥生文化——日本文化の源流をさぐる』平凡社 一九九一年 一九四—一九五ページ。
- (8) 宮本長二郎発言 注(1)に同じ。四五ページ。
- (9) 浅川滋男「池上曾根遺跡からの反論——復元建物の実証性をめぐって」『建築雑誌』一九九八年一月号 六七ページ。
- (10) 浅川滋男「太陽にむかう舟——池上曾根遺跡・大型掘立柱建物の復原」『奈良国立文化財研究所年報』一九九八年・I 一八ページ。
- (11) 注(9)に同じ。六八ページ。
- (12) 注(10)に同じ。一八ページ。
- (13) 注(9)に同じ。六八—六九ページ。
- (14) 和泉市教育委員会『史跡池上曾根遺跡保存整備事業報告書別冊 よみがえるいずみの高殿——弥生時代大型掘立柱建物と割り貫き井戸の復元』二〇〇一年 一五ページ。
- (15) 同前。一六ページ。
- (16) 乾哲也編『よみがえる弥生の都市と神殿 池上曾根遺跡——巨大建築の構造と分析』批評社 一九九九年 四四ページ。
- (17) 注(9)に同じ。七〇ページ。
- (18) 同前。六七ページ。
- (19) 浅川滋男『住まいの民族建築学——江南漢族と華南少数民族の住居論』建築資料研究社 一九九四年 二二二ページ。

- (20) 同前。
- (21) 浅川滋男発言 林謙作・岡村道雄編『縄文遺跡の復原』学生社 二〇〇〇年 四〇ページ。
- (22) 注(9)に同じ。七〇ページ。
- (23) 浅川滋男「御所野遺跡——縄文時代中期後半の環状集落(岩手県)」『建築雑誌』一九九八年九月号 二三ページ。
- (24) 同前。
- (25) 宮本長二郎「松野遺跡の高床建築について」神戸市教育委員会編『松野遺跡発掘調査概報』一九八三年 二四ページ。
- (26) 同前。二五ページ。
- (27) 宮本長二郎「神宮本殿形式の成立」『瑞垣』第一八三号 一九九九年 一〇ページ。
- (28) 宮本長二郎発言 一九九九年一月二〇日 国立歴史民俗博物館編『歴博フォーラム 高きを求めた昔の日本人——巨大建造物をさぐる』山川出版社 二〇〇一年 一二二ページ。
- (29) 宮本長二郎「原始・古代住居の復元」(日本の美術 第四二〇号) 至文堂 二〇〇一年 一七ページ。
- (30) 宮本長二郎「古代の住居と集落」『講座・日本技術の社会史』(第七巻) 日本評論社 一九八三年 二九ページ。
- (31) 注(29)に同じ 二五ページ。
- (32) 宮本長二郎「建物か記念物か——縄文時代掘立柱遺構の復元」注(28)に同じ 二七ページ。
- (33) 注(29)に同じ、五五ページ。
- (34) 金関恕「座談会での発言に関するお詫び」『建築雑誌』一九九

八年一月号 七〇ページ。

(35) 高倉洋彰『交流する弥生人——金印国家群の時代の生活誌』吉川弘文館 二〇〇一年 一四四ページ。

(36) 中村俊介『文化財報道と新聞記者』吉川弘文館 二〇〇四年 七六ページ。

(37) 乾哲也「池上曽根遺跡の大型建物の復元」浅川滋男編『先史日本の住居とその周辺』同成社 一九九八年 三七五ページ。

(38) 注(16)に同じ。三二ページ。

(39) 同前。七九ページ。

(40) 同前。三九ページ。

(41) 注(14)に同じ。三二ページ。

(42) 同前。一四ページ。

(43) 注(16)に同じ。三八ページ。

(44) 注(9)に同じ。六七ページ。

(45) 金関恕発言 注(1)に同じ 四四ページ。

(46) 藤森照信発言 同前。

(47) 山岸常人発言 同前。

(48) 乾哲也・秋山浩三「ふたつの絵画土器」『弥生の環濠都市と巨大神殿』池上曽根遺跡史跡指定二〇周年記念事業実行委員会 一九九六年 四五—四六ページ。

(49) 注(16)に同じ。四九ページ。

(50) 同前 四八—四九ページ。

(51) 注(10)に同じ。一八ページ。

(52) 注(9)に同じ。六九ページ。

(53) 浅川滋男『神殿論』に対するコメント」注(19)に同じ。三六〇ページ。

(54) 注(16)に同じ。五〇ページ。

(55) 注(14)に同じ。一八ページ。

(56) 注(16)に同じ。六六ページ。

(57) 浅川滋男「池上曽根遺跡の大型掘立柱建物をめぐる諸説の批判と解釈」『ヒストリア』第一五二号 一九九六年 七一ページ。

(58) 注(14)に同じ。二三ページ。

(59) 同前。

(60) 注(16)に同じ。五八ページ。

(61) 注(9)に同じ。六九ページ。

(62) 同前。

(63) 注(16)に同じ。六五ページ。

(64) 注(9)に同じ。六九ページ。

(65) 注(14)に同じ。二〇ページ。

(66) 注(10)に同じ。一九ページ。

(67) 注(14)に同じ。二五ページ。